筑波大学　地域研究28：51－65，2007　　Area Studies Tsukuba 28：51－65，2007

談話終結部における助詞「は」と「が」の選択

ー日本語母語話者と学習者の語りの分析からー

Choosing between the particles "wa" and "ga" at the end of the discourse:

An analysis of narrative discourse by native and non-native speakers of Japanese

俵　山　雄　司
TAWARAYAMA Yuji

When non-native speakers of Japanese (NNS) are asked to write an essay or give a speech, they often fail to close off the discourse in a proper way. This gives an overall bad impression to the reader or listener. To solve this problem, it is essential that NNS become skillful in closing the discourse smoothly by keeping a connection to former parts.

This paper investigates the choice of the particles "wa" and "ga" as an expression to close the discourse smoothly by keeping a connection to former parts of a narrative discourse. A four-frame comic strip was used to obtain data. Informants were asked to explain the comic to the listener.

Before investigating the choice between the particles "wa" and "ga", I analyze the use by native speakers of Japanese (NS) of the particle that marks the leading character of the comic strip frame by frame to confirm if the choice of particles is affected by the position in discourse.

The results show that 1) there is an obvious tendency (9 of 12 informants) to choose "wa" in the fourth frame (i.e. the end) rather than in the third frame, 2) of these 9 informants four topicalize the leading character using "wa" for the first time in the last frame. These observations suggest there is a preference among NS to use "wa" especially at the end of the discourse.

Also, I argue that the topicalization of the leading character by using "wa" puts a spotlight on the leading character before the narrative discourse reaches the actual finale. By doing so the speaker indicates his intension to close the discourse.

However, comparing NS and NNS, a considerable number of NNS also use "wa". In

spite of this, it is dubious that NNS choose "wa" for the same reason as NS because NNS choose "wa" throughout the discourse except at the very beginning, or choose "wa" by mistake in a sentence explaining a reason.

These observations indicate the inclination of the NNS's choice of particle to mark the leading character is not as clear as NS's choice. Besides, NS not using "wa" in the end of the discourse use other expressions to communicate directly or indirectly that the discourse is reaching an end, but NNS not using "wa" did not make use of such other expressions. This presents one of the causes that NNS fail to communicate their intension of closing the discourse and the punch line of the story.

1．はじめに

日本語学習者に作文やスピーチをしてもらうと，締めくくりが上手くいかないばかりに，全体の印象が損なわれてしまうことがある。とりわけ，話の最後に「落ち」がある場合は，最も重要な部分の伝達が失敗したこととなってしまい，印象を損なうのみならず，相手に誤解を与えてしまうことさえ考えられる。

このようなことを解決するには，「何を」「どういう順で」「どのように」述べるかという内容面での工夫の他に，前の部分との繋がりを保ちつつ談話をうまく終結にもっていく表現への習熟が不可欠である。

永野（1986）は文章の書き納めの文を，主題の「は」の有無を判断基準として，現象文・判断文・述語文・準判断文に4分類して分析し，それぞれの文の文法的性質が書き納めの余韻や印象に関わっていると述べている。永野によれば，現象文とは「が」が主語を表す文，判断文とは「は」が主語を表す文，述語文は元来主語の立ちえない文，準判断文とは「は」の主語が省略されたものである。これは，つまり，「は」と「が」の選択が文章の書き納めになんらかの表現効果をもたらすこと，またある場合は，その選択が不適切なものとなるということを示唆している[1]。

もちろん，その文章のジャンルや内容，構成が異なれば，自ずと「は」と「が」どちらの使用が適切となるかも異なってくることは容易に予測できる。しかしながら，ジャンル・内容・構成の組み合わせのあらゆるケースのすべてを一度に検証することは，まず不可能である。そのため，談話における「は」と「が」の選択の全体像の解明には，様々な条件でのケーススタディの集積が必要となってくるであろう。

本稿では，「は」と「が」の選択が談話の終結になんらかの影響を及ぼしているという予測のも

1　永野が例として挙げている文章は，小説や詩，新聞のコラムなど文学的技巧や修辞を盛り込むことが期待されている文章であった。これらは，我々が一般的に仕事や日常で書くことを求められる文章とは相当異なる性質のものであるため，ここでの観察が，どの程度一般性のあるものかについては別に議論する必要がある。

とに，談話終結部での「は」と「が」の使用状況を調査し，その背後にある原理を探る。データとしては，1篇の4コマ漫画のストーリーについての語りの談話を用いる。具体的には，まず，日本語母語話者（以下NS）が「は」と「が」をどのように選択して語りを終えているか分析する。さらに，それを日本語非母語話者（以下NNS）の語りと比較することで，学習者の談話にどのような問題があるのかについても論じる。

2．先行研究

談話の終結部での「は」と「が」の選択の原理について扱っている研究は管見の限りない。ここでは，談話全体における「は」と「が」の使い分けに関する研究のうち2つを取りあげて概観する。

Maynard（1987）やメイナード（1997）は，昔話のテクスト中に登場する人物をマークする助詞に焦点をあて，「は」の談話機能を論じている。ここでは，まず議論の前提として，従来の文レベルの「は」と「が」の研究で提唱されてきた「が」が新情報をマークし，「は」が旧情報をマークするという考えのみでは，以下のような例を処理できないことが指摘されている。

（1）むかし，むかし，あるところに，おじいさんとおばあさんとがおりました。ある日，おばあさんが川へせんたくにいきました。川上から箱が二つながれてきました。プカプカ，プカプカ。これを見ると，おばあさんが呼びました。（以下略）　（メイナード1997：104）[2]

たしかに上記の例では，旧情報と解釈されるはずの第2・4文の主格名詞「おばあさん」が「が」でマークされている。メイナードはこれを「ステージング」という概念を用いて説明を試みている。これは，「は」による主題化，そして「が」を含む他の助詞による非主題化の選択は，語り手が文章にどのような効果をもたらしたいかに影響されるというものである。ここでは，主題化された登場人物は物語を進める役割を果たし，非主題化された登場人物は，主題化された人物が展開する話の筋に従属的に統合されることによって理解されるとしている。

野田（1996）は，文章・談話中の「は」と「が」の使い分けの傾向を，「日常の談話」「報道の文章・談話」「説明の文章・談話」「物語の文章」という4つのジャンル別，そして「最初の文」「途中の文」（第2文以降）という出現位置別に分析している。本稿のデータと最も性質が近いと思われる物語の文章の途中の文に関して野田は，物語に既出の人物の行動は，主題を持つ文で表現されることが多いが，「予想していなかった意外な行動を新しいできごととして述べる」時は，主題を

2　原文は一文ごとに改行されている。

3　また，特に一般化はされていないが，永野（1986）にも同趣旨の説明がある。永野は「おうむのるすばん」という文学的文章を題材に主語の連鎖を分析する中で，既出の人物「おとうさん」が，「おとうさんがかえってこなかったという事態が新しく起こったという意味」で，現象文の形をとって新しい事象として表現されている例を挙げている。

持たない文になるとしている[3]。

このうち特に，語り手がストラテジーとして主題化・非主題化を駆使しているというメイナードの分析は「は」と「が」の選択を司る原理として非常に説得力のあるものである。だが，やはり談話の内容・展開・場面によって，どちらかが選択を受けやすいという傾向は存在するであろう。本稿は，複数の母語話者と非母語話者に同一の４コマ漫画のストーリーを語ってもらい，そこでの「は」と「が」使用の傾向を分析することで，終結部における「は」と「が」の選択について新たな知見を得ようとするものである。

３．分析資料

分析の資料としたのは「あこがれ」と題された４コマ漫画のストーリー（稿末資料参照）についての語りである。データ収集は以下のような手順で行った。

１）まず，語り手役の被験者に4コマ漫画を見せて内容を十分に理解してもらう。
２）その後に，聞き手役の被験者に向かって漫画を見ながらそのストーリーを語ってもらう。なお，聞き手はストーリー説明の最中や終了後に内容について語り手に質問してもかまわないとした。

以上の手順によって，語り手・聞き手ともにNSのもの12例，語り手がNNSで聞き手がNSのもの12例の計24例の談話が得られた。本稿ではこれを文字化したものをデータとして用いる[4]。

なお，ここで終結部と認定したのは，上記データのうち，４コマ目を説明している部分である。ただし，以下の部分は分析の対象から除いた。

・一度語り終えた後，語り手が再度同一の内容を語っている部分
・聞き手から語り手の質問への返答
・語り手から聞き手への理解を確認する質問（「わかった？」「OK？」など）
・ストーリーについての感想・意見

分析の範囲を明確にするために，１つ例を挙げて説明しておく。

（２）022Ａ　でー，それを見てる家族の人がー，買ったのか，とか，お前も男っぽいとこあるんだな，見なおしたとか言って
023Ｂ　うん
024Ａ　…こうー，ほめてるらしいんだけれども／／ー，

4　資料はすべて筑波大学大学院修士課程地域研究研究科開設の「日本語構造論（２）」（担当：砂川有里子教授）の1999年度の授業において受講者によって採集，文字化されたものである。被験者は話し手・聞き手ともに大学生や大学院生であり，NNSの日本語レベルはすべて日本語能力試験2級から1級程度である。

025B　／うん

026A　実は，こう男っぽいとか，じゃなくー？，彼はー，料理をー，する人ー，のようで，鍋つかみとしてさいこうー，ということでした

027B　…彼が使ってるの？鍋つかみ

028A　鍋つかみ？，彼がー，｛笑い｝鍋つかみとして／／ー，お鍋もってる

029B　／うん

030A　エプロンもして，(0.3) というストーリーです

031B　…はい

032A　…分かった？

033B　うん　(993048J)

上記の例において４コマ目の説明をしている026Aは分析の対象となる。しかし，022A・024A（３コマ目の説明）と028A・030A（聞き手の質問への返答）の部分は分析の対象とはしない。

また，使用されている助詞を認定する際は，ストーリーの登場人物をマークするもののみを対象とし，「最後は」「４コマ目は」など状況を表す句についた「は」などは分析対象から除外している。

４．NSの「は」と「が」の選択

４．１　NSの語り全体における「は」と「が」の出現傾向

終結部における「は」と「が」の選択を分析する前に，終結部であることが「は」と「が」の選択になんらかの影響を及ぼしているかどうかを確認する必要がある。先にも述べたように，ここでは終結部を４コマ目の説明が行なわれている部分と捉えている。そこで，まず４コマ目の「は」と「が」の出現傾向とそれ以前の１・２・３コマ目の「は」と「が」の出現傾向とを比較してみる。

以下の表１は，各コマにおいて，主人公の「かりあげクン」がどのような助詞でマークされていたかをデータ別に一覧にしたものである[5]。なお，主人公を表す名詞句全体が省略されている場合はEの記号で示し，その省略がどの格に相当するものかを併せて記した。

なお，ここでは意味の上から格を復元し，主題「は」の省略と思われる場合でも述語との意味関係によって「ガ格」「ニ格」として表示している。

まず１コマ目で用いられている助詞を見ると，全員が「が」の使用で一致している。これは，はじめて語りに登場した主人公が，典型的な新情報として伝達されたためである。次に，２コマ目に着目すると，「は」が６例，「が」が６例と数の上で拮抗している。ここでは，おおむね４コマ漫画に含まれている４つの絵のそれぞれについて描写をするというスタイルで説明した場合に「が」が，

5　ここで挙げている助詞は，各コマの説明の冒頭で用いられているものである。その後も同じコマの説明が続く中で省略形や別の助詞を伴って主人公が表現されている場合もあるが，ここでは議論を単純にするために，冒頭で表れたもののみを表示している。

表1　各コマにおける主人公をマークする助詞（NS）

	1	2	3	4
973014J	が	は	E（ガ格）	は
983006J	が	は	E（ガ格）	は
983026J	が	が	に	は
983027J	が	は	は	が
993007J	が	は	は	は
993018J	が	は	が	は
993021J	が	が	が	は
993029J	が	が	は	は
993048J	が	が	E（ガ格）	は
993052J	が	が	E（ガ格）	E（ガ格）
993057J	が	は	が	が
99k113J	が	が	E（ガ格）	は

それぞれの絵の描写というより一連の物語として全体を統合して語った場合に「は」が選択されるという傾向があった。以下それぞれの例を挙げておく。

（3）004A　で，えー二コマ目では，その一練習試合を見ていた少年が，え，スポーツ用品店で，えーボクシンググローブが飾ってあるのをみつめています　(993021J)

（4）001A　（略）で，コボちゃんは，その帰りがけに，あのー，スポーツ用品店の前で，グローブ売ってるの見かけました，（以下略）　(983027J)

（3）の例では文頭の「二コマ目では」と文末の「ています」により，絵を描写するスタイルの語りが行われていることが明らかである。他方，（4）では文頭文末ともに描写スタイルを表す要素はなく，統合された一連の物語を構成する語りのスタイルの存在をうかがわせる。

3コマ目になると，全12例中，ガ格の省略が5例，「は」が3例，「が」が3例，「に」が1例と表現の選択に目立った傾向性は見られなくなる。また，直前の2コマ目が「が」であっても「が」で続くとは限らず，同様に「は」であっても必ずしも「は」が続くとは言えない。

そして，終結部である4コマ目ではどうかというと，「は」の出現が12例中9例とかなり優勢となっており，あとは「が」が2例，登場なしが1例となっている。これは全員助詞が一致した1コマ目はともかく，2・3コマ目の助詞の選択傾向と比べると，かなりはっきりした傾向があると言える。また，983026J，993021J，993048J，99k113Jでは，4コマ目までは，主人公が一度も主題化されずに示されており，4コマ目で初めて「は」で主題化されている。これはこの漫画の4コマ目に「は」を選択させるなんらかの条件が存在していることの傍証である。

以下では，終結部に見られるこの助詞選択の傾向が，語り手の語りを収束させる意識を示すものである可能性について述べる。

4．2　終結部における助詞の選択と語り手の意識

NSが主格名詞をマークする助詞として「は」を選択しているケースは（5）（6）のようなものである。

（5）011A　で，4コマ目，には，その少年は，ボクシングをするのではなくて，えー最終的には，なげ，鍋つかみとして
012B　はい
013A　最高ということで，えー，グローブをなべ，鍋つかみ，として使っています
(993021J)

（6）011A　コマが変わって，でもその男の子は家でそれをなべつかみとして使っています{笑}
(993029J)

1コマ目から3コマ目までの説明の箇所で，主人公は「は」「が」「に」などの助詞にマークされた名詞句，省略形など様々な表現形式によって語りに登場している。しかし，終結部において語り手は，「は」を使って主人公を主題化して示す傾向があった。ここでは文法的には「が」を使うことも可能であるし，無助詞も一応は使用可能である。では，ここでなぜNSに「は」を選択したものが多かったのであろうか。その動機についていくつかの側面から考えてみる。

まず，この漫画を内容の面からみると，終結部はいわゆる「落ち」の部分であり，ここまでのストーリーから予想される帰結とのギャップが表現される場である。ボクシングの練習風景をのぞく（1コマ目），スポーツ用品店の店先でグローブを見る（2コマ目），購入したグローブを友人に披露する（3コマ目）という行動からは，主人公は当然ボクシングをするためにグローブを購入したという予想が形成される。その予想を意外な帰結で覆すことが読み手におかしみを感じさせるもとになっている。

ただ，この「意外な帰結」という点に着目した場合，先行研究での観察結果との齟齬が生まれる。すなわち，野田（1996）が述べている「予想していなかった意外な行動を新しいできごととして述べる」時は，「は」を持たない文が用いられるという観察との食い違いである。ちなみに，野田が挙げている例文は以下のようなものである。

（7）　「大学行けるの？」
「だって無試験だもん」
「へえ……。じゃあ三年も遊んでられるんだ」
「うん」
陽子が急に睨むような目で真規を見上げた。
「そうやって，ずっとこれからもどうにかなると思ってんでしょ」
（野田1996：167）

一方で終結部での助詞「は」の選択が好まれることをサポートする要素もある。それは，この終結部において「は」でマークされているのがこのストーリーに一貫して登場し続ける主人公であるということである。メイナード（1997）は宮沢賢治の『風の又三郎』の２つの場面を分析し，作者によって主題化され続ける登場人物は，それぞれの場面において話の展開の軸となる人物であることを述べている。本稿でとりあげた４コマ漫画では話の展開の軸となりうるような登場人物は，単純に登場するコマ数からみても主人公だけである。こうしてみると，終結部において主人公が「は」を伴って提示されるのは不思議なことではない。

ただ，先に提示した表１をみてわかるように，本稿のデータでは主人公が常に主題化されているわけではない。ストーリーのどの部分で主人公の主題化が行われているかという視点から，各データを分類した結果を以下の表２に示す。

表２　ストーリー上で主人公が主題化されている部分（NS）

	データ名	数
主題化なし	993052J	1
２コマ目のみ	993057J	1
３コマ目のみ		0
４コマ目のみ	983026J，993021J，993048J 99k113J	4
２・３コマ目	993027J	1
２・４コマ目	973014J，983006J，993018J	3
３・４コマ目	993029J	1
２・３・４コマ目	993007J	1

全体のデータ数が少ないためはっきりしたことはいえないが，２・４コマ目の３例と4コマ目の４例という数字が目を引く。前者に関しては，間に挟まれた３コマ目のみ主題化が選択されていないということになる。３コマ目をみてみると，セリフを発する主人公以外の人物が登場しており，ストーリー上で大きな役割を果たしている。ここでは，この人物をストーリーの前面に押し出すために主人公が一時的に非主題化されたり省略されたりしていると考えられる[6]。そして，後者は，そこまでずっと各コマを描写スタイルで説明してきたが，最後になって，主人公を主題化しストーリーの軸として前面に押し出していると捉えられる[7]。

先にも述べたようにここでは，「意外な出来事」という「が」の選択に適した内容的条件がある

6　なお，３コマ目の友人は12例中４例で主題化されている。この４例において，主人公をマークする助詞は「は」が１例，「が」が１例で，名詞句自体の省略が２例となっている。

7　Clancy and Downing1987は，談話における「は」の多くは，対比関係にもとづいて局所的な結束性を表す手段として用いられているとしている。Clancy and Downingは談話における対比関係を３分類しており，本稿の終結部における助詞「は」の使用は，このうちの「間接対比マーキング」(indirect contrast marking) にあたると考えられる。しかし，この「間接対比マーキング」は他の研究で述べられている「対比」と比較すると，「対比」性がない，あるいは極めて薄いと解釈されるものである。そのため，この「対比」という意味が「は」の選択・非選択の決定要因になっているとは考えられない。本稿では，「対比」の意味の認定を，多くの研究で認められている一般的な基準に基づくことにする。この基準では本データ中の終結部における「は」はすべて主題とみなされるため，その使用を「対比」の観点から論じることはしない。

のにも関わらず，語り手が主人公を主題化して示している。それは，最後に主人公をストーリーの前面に押し出すことで，そこまでの描写をすべて主人公のもとに統合させたいという語り手の選択ではないかと思われる。これは，語りを４つの出来事の集積としてではなく，主人公にまつわるひとつの物語としてまとめたいということの表れだと言い換えることもできる。そして，このようにして主人公のもとに物語をまとめることが談話の収束の暗示となり，助詞「は」の終結部での使用につながっている可能性がある。

しかし，そうすると当然，なぜ12名のうち，２名が「が」，１名が省略という表現を選択したのかという疑問がでてくる。「が」を使用したうちの１例については，以下の（８）に示したように，主人公をあらわす名詞句が従属節内に入っているものであった。このケースでは，談話的な制約より文法的な制約が優先された結果「が」が選択されたものと考えられる。

（８）003Ａ　意外と男っぽいなと，ま，あのコボちゃんを見直すような態度で，誉めるんですね，でも結局，コボちゃんがそれを何に使ったかと言えば，鍋つかみに使って，これいいねえというふうな感じで　(983027J)

残りの「が」を使用した１例と省略を使用した１例は，２例とも談話中に談話の収束を表示する別の表現が用いられており，それが「は」による語りの統合を不要にした可能性がある。まず「が」を使用した（９）を示す。

（９）152Ａ　で最後にですね
153Ｂ　うん
154Ａ　どういう，これおちですね
155Ｂ　うん
156Ａ　どういうおちかというと／／想像してください
157Ｂ　／うん
158Ａ　最後はですね
159Ｂ　うん
160Ａ　そのーースパーリング見てたひとがグラブをつけて，なべをもっています
161Ｂ　なべ！
162Ａ　なべをもっています。え，せりふとしてはなべつかみとして最高，／／それがおちですね
163Ｂ　／あーあ，｛笑｝はい
164Ａ　で，そういうことですね　(993057J)

上記の例ではまず，「最後に」「最後は」という終結を語彙的に示す要素が終結部の冒頭で用いられている。それに加えて，ここには「どういうおちかというと」という疑問詞を含んだ注釈的な従

属節が含まれている[8]。この従属節を使用することで語り手はストーリーの展開する可能性を限定し，また聞き手に対しても注意を一点に絞らせようとしていることがうかがえる。この語りの展開する可能性を限定するということは，すなわち，談話が終わりに近づいていること暗示するものと言えよう[9]。

もう一方の主人公が省略された場合は，以下の通り，終結部の冒頭に「最後のおちちゃう」という言葉があり，これが「最後の落ち」，つまり4コマ漫画の終結が近いことを明示的に示しているため，「は」の使用による語りの統合を必要としなかったのではないかと推測される。

(10) 012A　でも実はなんかさ最後の　おちちゃうこー
　　013B　うん
　　014　…
　　015A　なんかグローブを鍋つかみとして使ってて　{笑い}
　　016B　うんうんうんうん
　　017A　鍋つかみとして最高とか／／言っているよね，という4コマ　(993052J)

以上でみてきたように，「は」が選択されなかった上記の3例では，話の焦点を絞るある種の従属節や終結を語彙的に示す要素があった。もちろん他の要因によって「は」の選択が行われなかったという可能性も捨てきれないが，ここではこれら他の表現によって終結の意図が伝達されたため，主人公の主題化という間接的な手段による物語のまとめが必要ではなかったという可能性を指摘しておきたい。

5．NNSの「は」と「が」の選択

次に，NNSの語り終結部における「は」と「が」の選択について考えることにする。まず，NSの場合と同様に4コマ目の「は」と「が」の出現傾向とそれ以前の1・2・3コマ目の「は」と「が」の出現傾向とを比較してみる。以下の表3は，各コマにおいて，主人公がどのような助詞でマークされていたかをデータ別に一覧にしたものである。なお，省略の表記に関しては表1と同様であるが，文法的に誤りとなる助詞を選択した場合はアスタリスクを助詞の脇に記すとともに，正しく使用された場合の助詞を丸括弧に入れて示した。

コマごとに見ていくと，まず1コマ目では12人中11人が「が」を使用している。「は」を使用した残り1名も，以下の例のように本来は「が」を使うべきところで誤って「は」を用いているもの

8　なお，先に示した（8）の例でも同種の従属節（「何に使ったかと言えば」）と終結を語彙的に示す要素（「結局」）が用いられている。

9　NSでは，（8）（9）の例も含め，このような注釈節を終結部で使った者が4名いたのに対し，NNSでは1名であった。この差異は，このような従属節を使用する技能が，NNSにとってはなじみのないものであることを示唆している。

であった。したがって，1コマ目のように新人物を導入する場面ではNNSの助詞の選択にほぼ問題はないと言える。

(11) 001F　ある日，ある少年，は（→が），えっとー，きんじょうのボクシング場に見に行っていました　(983026F)

表3　各コマにおける主人公をマークする助詞（NNS）

	1	2	3	4
973014F	が	が	E（ガ格）	φ
983006F	が	が	が	φ
983026F	は*（→が）	は	は	は
983027F	が	は	は	は*（→が）
993007F	が	が	が	が
993018F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	φ
993021F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	が
993029F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	は
993048F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	は
993052F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	は
993057F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	は*（→が）
99k113F	が	E（ガ格）	E（ガ格）	E（ガ格）

2コマ目に関してはNSが「は」と「が」の使用が6例ずつだったのに対して，ガ格の省略が7例，「は」が2例，「が」が3例と省略の比重が高く，かなり異なった様相を呈している。3コマ目に関して言うと，NSとNNSの出現傾向は比較的似通っており，省略＞「は」≧「が」＞その他の助詞（NSのみ）のような傾向が見てとれる。NSとNNS両者の2・3コマ目における各表現の出現数をまとめたものが以下の表4・5である。

表4　2コマ目における主人公をマークする助詞の比較

	「は」	「が」	省略
NS	6	6	0
NNS	2	3	7

表5　3コマ目における主人公をマークする助詞の比較

	「は」	「が」	「に」	省略
NS	3	3	1	5
NNS	2	2	0	8

ここで，表3に立ち戻り2コマ目と3コマ目の欄を見てみると，助詞の選択に一定の関連性があることがわかる。すなわち，12人中973014F以外の11人が2コマ目で選択した表現形式をそのまま3コマ目で踏襲しているのである。中でも2コマ目でガ格省略を選択した7人の全員が以下の(12)のように3コマ目の語りを同じくガ格省略で行っているのが目を引く。

(12) 001F　えっと，男の人がボクシングをしている場面を見ています
002J　はい
003F　で，帰り道ですかね？その，［ガ格省略］帰り道で，スポーツ用具店でボクシンググローブを見ています
004J　うん
005F　で，［ガ格省略］それを買ってきてそれを友達の前で披露しています
で，友達がー，おまえも意外と男っぽいとこがあるんだなって…ほめています
(993018F)

ペンギンを主人公としたアニメーションのストーリーの語りを分析した渡辺（2003）では，NSが，談話の中で省略可能な指示対象を語る際に，わざわざ名詞句の形で指示対象を出すという現象に注目し，これはストーリーが新たな場面に展開することを示すためであるとしている。また，一方で，NNSの語りにおいては，同じ動作主が続く限り，ずっと省略形を使いつづける例があったとも述べている。本稿のデータでも上記のような省略形が日本語学習者の語りに特有であったことは，この観察を裏付けている。

次に，終結部である４コマ目の主人公の描写についてみてみる。数字を見ると12例中，「は」が６例，「が」が２例，無助詞が３例，省略が１例となっている。これはNSの数字と比べると，無助詞の存在が目立つものの，それほど大きな差がないように見える。また，２・３コマ目で連続して省略形を用いている７人に限ると４人が４コマ目を「は」で語り終えている。

表６　４コマ目における主人公をマークする助詞の比較

	「は」	「が」	無助詞	省略
NS	9	2	0	1
NNS	6	2	3	1

ただ，だからといって，NNSもNSと同様に「は」を主人公のもとにストーリーを統合する手段として用いていると断じることはまだできない。表３をみると983026Fはすべてのコマ，983027Fは冒頭部を除く２・３．４コマ目で主人公を「は」でマークしている。今回のデータの12人中10人が登場人物を導入する１コマ目以外ではすべて同じ表現を用いて主人公をマークしているということを考えると，前の２者は終結部だからという理由で「は」を使用しているわけではなく，一定の形式で語り継いでいるだけだとも推測される。

それに加えて，データを観察してみると，NNSの６例のうちの２例の「主人公をあらわす名詞＋は」は，通常従属節内に含まれるとの解釈を受けるものであり，本来は「が」を使うべきところである。これを勘案すると「は」の割合はそれほど多くないと言えるだろう。以下にその例を示す。

(13) 039F　その子供は，すごくボクシングに興味あるっと，思っているわけ
040J　はいはいはいはい

041F　でも実は
042J　ふん
043F　その子供は（→が）
044J　ふん
045F　その手袋，買ったのは
046J　うん
047F　お鍋？つかみとして，最高だと思って
048J　はあーーー
049J　／／なるほど
050F　／からです　(983027F)

(14) 005F　それであの男の子の両親はあの男の子が，ボクシングをしようとすると思っていましたが
006F　あの男の子は（→が）グロブを買った理由は，なべつかみーとして，使おうと買ったことです。　(993057F)

上記2例は両者とも「の」や「理由」といった名詞を修飾する節内での「は」の使用制限の問題が誤用になって表れたものである[10]。

以上の観察から，語りの談話の終結部では，NNSの主人公をマークする助詞の選択に関してNSほどのはっきりした傾向はないといえる。また，NSでは「は」を使用していない例でも，談話が収束に向かっていることを明示的・暗示的に示す表現を使用していたが，NNSではそのような表現の使用は見られなかった。このことはNNSが談話終結の意図や，話の落ちの伝達に失敗する原因の一端を表しているといえる。

6．おわりに

本稿では，前の部分とのつながりを保ちつつ談話をうまく終結にもっていく表現として「は」と「が」に着目し，4コマ漫画の語りのデータを分析した。その結果NSは終結部でストーリーの主人公を「は」でマークする傾向があることがわかった。そのうえで，終結部における主人公の「は」による主題化は，最後に主人公をストーリーの前面に押し出すことで，そこまでの描写をすべて主人公のもとに統合させたいという語り手の意図が関連している可能性を提起した。

また，NSとNNSのデータとの比較を行ったところ，NNSも少なくない割合で終結部において

10　こういった「～のは～からです」「～理由は～ことです」のような行動の理由を述べる文型を使用したのは，このNNS2例のみでNSでは同様の例はなかった。このような解説的な文が最後に来た場合，「落ち」が何を意味するかはっきりわかる一方で，「落ち」の表現としては硬すぎて語りの終結にふさわしくないと判断されてNSに敬遠されたという可能性が考えられる。

「は」の使用があった。しかし，NNSは，冒頭部以外は全体を通して「は」を選択していたり，理由を解説的に述べる文で誤って「は」を使用していたりする例があったため，NSと同じ動機で「は」が選択されているとは必ずしも言えないことを述べた。

今回の分析にデータとして用いた4コマ漫画は主人公が最初から最後までストーリーに登場しつづけ，最後に落ちがあるという典型的な4コマ漫画の構造を持っていた。ここで得られた結果は同様の構造を持つ談話にも相当程度適用可能であると考えられる。しかし，方法論的な問題でこのような調査で得られた結果が，いったいどれだけの範囲に応用可能であるかは予測が難しい。また，終結と関連するほかの要素との関連も本稿では簡単に紹介するに止まった。今後は様々なジャンル・内容・展開の談話について調査を行い，談話終結に関わる言語形式全体についての解明を行う必要があろう。

参考文献

亀田千里（2000）「条件形式による注釈節について－実例調査をもとに－」『筑波応用言語学研究』7 筑波大学文芸・言語研究科応用言語学コース

永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店

野田尚史（1996）『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版

ベケシュ・アンドレイ（2002）「日本語にいわゆる『ハの主題』はあるのか－文脈の観点から－」『東西言語の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成13年度Ⅴ』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織

メイナード・K・泉子（1997）『談話分析の可能性』くろしお出版

渡辺文夫（2003）『日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究』（平成13～14年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書）

――――（2005）「語りの談話における『は』の使われ方について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』1 山形大学

――――（2006）「ストーリーを語る談話・文章における『は』の使用の比較」『談話と文法の接点』（平成15～18年度科学研究費補助金基盤研究（B）「諸外国語と日本語の対照的記述に関する方法論的研究」研究論集）

Clancy, Patricia and Pamela Downing.1987 'The use of wa as a cohesion marker in Japanese oral narratives', Perspective on Topicalization: The case of Japanese WA, ed by John Hinds, Senko K. Maynard, Shoichi Iwasaki. Amsterdam: John Benjamins.

Maynard, Senko K. 1987 'Thematizetion as a staging device in Japanese narrative', Perspective on Topicalization: The case of Japanese WA, ed by John Hinds, Senko K. Maynard, Shoichi Iwasaki. Amsterdam: John Benjamins.

William Labov. 1972 'The transformation of experience in narrative', Language in the Inner City: Studies

in Black English Vernacular. Oxford: Blackwell.

＜会話資料書記法＞

…　一秒以上のポーズ

?　上昇イントネーション

／／　次の話者の「／」部分との発話の重なりの開始

／　前の話者の「／／」部分と重なっている発話の開始

（　）　聞き取りにくい部分

＊　聞き取りにくい部分のうち意味も音もわからない個所

｛　｝　非言語的な行動

資料（４コマ漫画）

（植田まさし『ほんにゃらごっこ　かりあげクン７』（双葉社）1984年より）